

平成30年度 学生海外PBLプログラム 概要

部局名 教育推進機構 教養教育開発実践センター

区 分	内 容
事業名	グローバル体験で地域ウェルネスの活性化を図る --Giving Community Wellness an Injection of Glocal Experience--
指導教員	① 教養教育開発実践センター バーマン・シャーリー ② 教養教育開発実践センター 多田 恵実
学生の所属	医学部医学科 1年生2名、医学部保健学科看護学専攻 1名、 理工学部自然エネルギー学科1年生1名・3年生1名、農学生命学部生物学科4年生1名
渡航先（渡航期間）	アメリカ合衆国ハワイ州（平成31年2月10日～平成31年2月20日）
実施スケジュール	平成30年10月2日～平成31年2月8日(教養教育後期授業) 教養教育授業による事前調査、授業内研究発表、現地とのスカイプ授業 平成31年2月10日 渡航 " 2月11日 ハワイ大学コミュニティ・カレッジ訪問 農園実習、授業参加 " 2月12-13日 コナ市西市役所高齢対策課訪問 健康保険施設、 自然エネルギー施設訪問 " 2月14日 第一回コナ市市民向けプレゼンテーションイベント開催 " 2月17日 第二回コナ市市民向けプレゼンテーションイベント開催 " 2月18-19日 病院実習、自然エネルギー施設・農園実習 " 2月20-21日 帰国 " 2月25日～ 調査結果まとめ
プログラムの概要	<p>1. 目的： 本事業は学生が地域社会の健康課題についてグローバルな視点で俯瞰し、地域での具体的な行動変容へと促す。学生は各人の課題設定、調査を約半年の教養教育の授業で行い、参加者として講義を受けるのみならず、国内と海外研修先において複数のイベント開催をし、当事者として能動的に地域理解を深めていく。</p> <p>2. 事業概要： 学生は弘前地域についての調査を1学期間、オンラインで現地と密な連絡を取りながら学び、成果発表会以外に4つの発表を行う。1)渡航先での地域健康サポートフェア、2)コナ市庁舎での青森の生活改善および医療についての発表、帰国後は3)保健学科内で弘前市民向けの成果発表会および4)イングリッシュ・ラウンジにおいて英語による発表を学生自身が行う。</p> <p>3. 設定した課題： 弘前市や弘前市関連地域における課題の設定と調査を二人一組、計3グループで行い各ペアが課題を二つ、各自が課題責任者として一つずつを担当する。前回のPBL事業を踏まえ、表層からさらに奥深い学びに導くため、前PBL参加者を助言者として参画させ、成果の展開と発展を促していく。</p> <p>4. 期待される成果等： 教養教育の英語による授業と調査に加え、渡航前からオンラインで現地と直接対話をし、受動的に学ぶだけでなく、複数のイベントを自ら責任を担って開催する主体的体験から学ぶ。イマージョンプログラムで人々との交流から直接受ける刺激はさらに多角的理解を促し、地域の健康課題解決と経済への貢献に役立つ端緒を探る機会となる。</p>

5. 当事業が弘前市や弘前市関連地域にあたる効果・成果等：

青森県は平均寿命全国最下位という課題がある。ブルーゾーンのようなウェルネス運動、健康マネジメント、医療、栄養学、災害時のメンタルケア、行政の専門家たちの講義を通じて、弘前市と地域に応用できる可能性を探る。また小規模地方都市として共通点が多い弘前市とハワイ・コナは前回から引き続き持続的・地域交流の構築可能である。

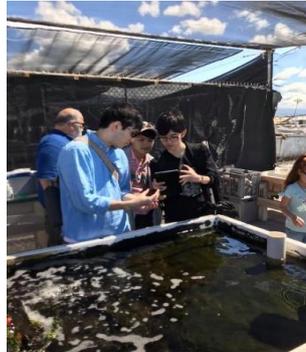
プログラムの様子



【写真1：ハワイ大学コミュニティカレッジ農園実習】



【写真2：第一回コナ市民向け健康フォーラム開催】



【写真3：NELHAアワビの養殖場見学】



【写真4：NELHA自然エネルギー施設見学】



【写真5：第二回コナ市民向け持続可能な社会フォーラム開催】



【写真6：ジョブシャドウイング、病院見学】

今後の展望

今回の参加学生の研究調査内容は、青森とハワイの両地域の特性を調査し、各学生の専門分野を生かし、医学チームは脳卒中予防対策、コミュニティと健康づくり、食習慣と健康について、科学チームは貝殻の触媒反応利用によるリサイクル、自然エネルギー発電の可能性、温泉を使った新しい農業やバイオマスを紹介しつつ土地に対する愛着と意識の高さについて着目したりと、実に多岐にわたる調査と提案を行った。渡航に先立ちそれぞれのグループは、イングリッシュ・ラウンジで発表のリハーサルを行い、弘前大学在学学生からも多くの質問を受け、在校生の関心も高めることができた。

ハワイ・コナ市現地においては、短期間の多忙な滞在のうちに市民向けに2回にわたり学生自身が開いたプレゼンテーション・フォーラムにより、訪問地の住民と直に質疑応答し、その反応から得た知見を更に自分たちの調査に成果として組み込み、帰国後はさらに地元弘前での住民向けの発表を行った。10月から2月の約4か月間にわたり教養教育の授業で各人の調査研究のコンテンツを深め、英語で行う発信力を涵養し、実際に現地に出かけて市民からの理解を得たのみならず、訪問地の事情と市民生活を知ることができたのは学生にとって大変有意義だった。今後は、各学部から、様々な学年から参加してもらい、専門分野の講師を日本側でも招き、出発前の調査をより充実させたい。また、訪問地では調査のみならず、人々との交流により多くのことを得た点も今回特筆すべき点であり、その相乗効果により、帰国後の人間形成と研究の深化と地域社会への広がりをも促進させていきたい。